別冊 分陀利華（ふんだりけ）

南無阿弥陀仏のお葬式

お寺葬パンフレット

平成２９年６月

真宗大谷派紫雲山 恩楽寺

はじめに……2
① 第一報を恩楽寺にする ……3
② お迎え ……4
③ 安置・枕経執行 ……5
④ 死亡届役所手続き ……6
⑤ 葬儀内容の打合せ ……6
⑥ 遺影写真の用意 ……6
⑦ 納棺、本堂安置 ……6
⑧ 通夜法要後のお斎 ……7
⑨ 葬儀式執行 ……8
⑩ お別れ・出棺 ……8
⑪ 火葬式執行 ……8
⑫ お斎 ……8
⑬ 還骨・初七日 ……9
⑭ お骨と中陰法要 ……9
⑮ 満中陰・年忌 ……9
お布施について……10
あとがき……11

はじめに

私たち一切衆生（あらゆる生命）を、必ず浄土に往生成仏させるという途方もない無差別究極の願いを、阿弥陀如来の本願といい、それが私たちに届いてはたらいている証を南無阿弥陀仏と申します。つまり、「どのようなあなたであっても、あなたは尊い、必ず救う」という如来本願に身をまかせ、確かな智慧と慈悲の中を供に生き、供に浄土に参ろうという親鸞聖人のみ教えを、南無阿弥陀仏と申します。

有難いことに、この身は阿弥陀如来より願われたいのちであります。娑婆の縁尽き煩悩執着を離れた時、即座に如来の願いを正しく頂戴し、成仏するのであります。

よって、お葬式は人生の中で最も厳粛な儀式なのです。浄土真宗の葬儀は、亡き人に別れを告げるという単なる葬送儀礼ではなく、故人を偲んで参集した者みな供に、本願念仏の導きに遇う大切なご縁であります。したがって、華美になることなく、また見栄や外聞にとらわれることなく、お浄土へ還られ成仏された大切な亡き人を偲びながら、人生における生死苦難の問題にしっかり目を向けつつ、浄土真宗にふさわしき葬儀を執り行うことが、願いを託された者の勤めであります。

お寺葬とは？

恩楽寺で取り組んでいます「お寺葬」とは、お寺の本堂を会場にして、葬儀費用をおさえつつ、阿弥陀如来のみもとにてお葬式を執行する取り組みであります。今この「お寺葬」の取り組みは全国で宗派を問わず急速に広まりつつあります。

お寺葬では、お寺の本堂にて、もともとの祭壇や設備、備品を利用するので、葬儀社の会館や控室、祭壇・諸々の備品などの手配が必要最小限で済み、とても安価にお葬式ができます。恩楽寺の「お寺葬」を現在手伝っていただいている葬儀社は様々ですが、いずれも葬儀費用は１９～４２万円でした（お布施は別です）。

各社の直葬プランや大阪市規格葬儀を利用し、そこで直接火葬場へ向かうのではなく、お寺の方で通夜葬儀式を執行します。日程にも余裕ができ、利用された方は葬儀社も含めてみなとても高い満足度を示してくださっています。ただし、喪主に葬儀に関する知識がないと要不要の判断が難しいので、これまでの「お寺葬」は葬儀社との打合せに私が同席しております。

お寺葬に限らず、これからお葬式を検討されている方は、お力になれることがたくさんありますので、ぜひ事前にご相談・お問い合わせください。またもしもの時は慌てず第一報を必ず恩楽寺にください。

平成２９年６月　恩楽寺 釋大信（乙部大信）

① 第一報を恩楽寺にする　喪主

いざ臨終を迎えた時、必ず一番最初に恩楽寺に連絡をください。深夜でも何時でも問題ありませんので、慌てずにご連絡ください。先に葬儀社に連絡した場合、業者によってはお寺葬に対応できない場合があるので、希望の形でお葬式ができなくなってしまいます。

ほとんどの病院、施設が葬儀社と提携し仲介料が発生しています。家族を亡くして気が動転している時に勧められるとついお任せしてしまいます。中には足下をみたり、悲嘆につけ込む悪徳の業者もあったりするので、気をつけないといけません。

☆余談☆

お坊さんと葬儀社のカンケイ

葬儀社やインターネット仏事仲介業者に、仲介料を払ってお葬式や法事を斡旋してもらっている僧侶が、宗派問わず増えています。契約のかたちは地域や業者によって様々ですが、お布施の７割～３割という形の仲介料が入るので、葬儀社や仲介業者はぜひとも契約している僧侶を呼びたいと考えています。

熱心なお坊さんに当たればいいのですが、業者に依存する僧侶はたいてい広報や布教といった活動努力をしません。中にはお寺に属さず葬儀専門の者もいるし、葬儀社に就職する者もいます。そういった葬式坊主・マンション坊主のほとんどが、遺族に寄り添う気持ちもなく、本来の使命である布教伝道する気が全くありません。とくに Amazon で始まった「お坊さん便」などでは、布教が禁止されています。教えのない儀式に何の意味があるのでしょう。

各宗派の本山や宗務所は、そういったトンデモ僧侶を取り締まる手段がないのが現状です。大変憂慮すべき悲しい事態であります。

② お迎え

喪主　葬儀社

葬儀社の手配で、寝台車でご遺体をお迎えし、安置場所に搬送します。費用はおよそ10000円～20000円ほどです。距離に応じて変わります。時間帯によっては深夜料金が発生します。

☆余談☆

寝台車（しんだいしゃ）と霊柩車（れいきゅうしゃ）のチガイ

「寝台車」と「霊柩車」は全く違います。ご遺体を運搬するという目的は同じですが、寝台車は内装・外装されておらず、ストレッチャー形式の遺体運搬車両です。霊柩車は、ご遺体を丁寧に運送、お見送りすることを目的に外装・内装が施されています。よって臨終場所から式場へ運送するときは寝台車、式場から火葬場へ出棺するときは霊柩車を使うことが一般的です。

霊柩車には等級があり、最近はあまり見かけませんが宮形霊柩車、洋型外国製高級霊柩車、国産霊柩車など様々で、だいたい 15000円～数十万円になります。車両にこだわりがない方は、寝台車で火葬場へ出棺することもありますが、一番利用されているのは 25000円前後の霊柩車です。

↑寝台車

↑国産の一般的な霊柩車

↑棺が安置できるように内装されています

③ 安置・枕経執行

喪主　葬儀社　お寺

葬儀社の担当者が恩楽寺の仏間（お座敷）にて、故人の尊厳と衛生面に配慮して、両手を組んだり、目を閉じたりなど施し、ドライアイスの処置をして布団にご安置します。また必要があれば湯灌（ゆかん）の儀を行います。

次にお寺とご遺族で枕経を執行します。短い法要ですが、故人が亡くなり浄土往生されたことをみんなで確認する大切な儀式です。

恩楽寺でご安置されれば、夜間の訪問客や、不断燃香など対応いたしますのでご安心いただけます。また布団にてご安置せず、そのまま納棺することもできます。

留意点

すでに法事や法要があったら……

恩楽寺にてすでに葬儀や法事、法要が予定されている場合は、大変恐縮ですが、お葬式の日程をずらしていただいております。

その間はお寺の仏間（お座敷）、あるいは本堂内陣余間（よま）、あるいは納骨堂にて、ご遺体をお預かりします。

まためったにありませんが、お座敷も余間すべて使えない場合は、ご遺体を安置する場所を他に考えないといけません。

その場合のご遺体の搬送先は、①自宅、②葬儀社にあずかってもらう、③遺体搬送業者（寝台車）にあずかってもらう、④遺体ホテルを利用する、のいずれかになります。

いずれも寝台車搬送料金が一行程、また場合によってお預かり料金やドライアイスの追加料金が発生します。お寺で法要が重なることはまれですがもしもの時はご容赦願います。

④ 死亡届役所手続き　喪主　葬儀社

葬儀社と共に死亡届を作成し、役所手続きを代行してもらいます。

⑤ 葬儀内容打合せ　喪主　葬儀社　お寺

お葬式の日程・形態を遺族、葬儀社、お寺の三者で相談して決めます。基本的に副住職（釋大信）が打合せに参加させていただいております。ご遺族の希望を取り入れ、会葬者に最適な告別式となるよう相談します。

⑥ 遺影写真の用意　喪主

故人のありし日のお姿や人柄がよくうかがえる写真を選びましょう。引き伸ばしは葬儀者に任せるか、近隣の写真店にても引き伸ばしができます。

⑦ 納棺・本堂安置　喪主　葬儀社　お寺

故人に旅支度をさせ、思い出の品と共に棺に納め、本堂内陣にご安置します。

お寺のお内陣と祭壇（野卓（のじょく））を使用しますので、祭壇設置費用が発生しません。

また、お花をお供えします。お花は別途費用が発生しますが、出棺時のお別れの時に故人へたむけるためにも使いますので、予算に余裕があれば惜しまず葬儀者に発注しましょう。

⑧ 通夜法要後のお斎（とき）

喪主　お寺

本堂で通夜法要を執行します。

法要後、座敷でお斎のお食事をします。これを夜とぎともいいます。

食事については、自身で手配すると負担がとても少なくすみます。いずれの業者も前日に予約注文しておくか、当日の通夜勤行開式前に出前を注文しておく方法もあります。業者に心当たりがない場合は、恩楽寺にゆかりのある業者をご紹介しております。

お風呂については、最寄りの銭湯をご案内しております。就寝については、３組までお布団がございます。他にも葬儀社に手配すればレンタルすることもできます。最寄りのビジネスホテルもご案内しております。

座敷（お斎会場）

・親族控え室、食事場所に利用できます
・お斎は約２５名まで着席できます
・本堂も食事会場として利用できます
・机、椅子をご用意できます
・テレビをご用意できます
・冷蔵庫も飲み物を冷やすなど利用できます

☆余談☆

こんな方法も……

法要が終わってからの食事については、これまで様々なかたちがありましたが、基本的に自身で用意・手配される方が多いです。子どもが沢山参列しているのでピザやお寿司を頼んだお家や、近くのお店で食事されたり、お寺でお斎をせずに帰宅される方もあります。中にはお斎の場に導師をお招きいただいて、もっと仏法が聞きたい、お坊さんに話を聞いて欲しい、というお家もありました。

お寺で一泊しないという場合も、恩楽寺一同が本堂についておりますのでご安心ください。

⑨ 葬儀式執行

喪主　お寺

本堂にて葬儀式を執行します。お寺葬では基本的に司会者などを葬儀社に手配していませんので、あらかじめ焼香の順番を決めておく必要があります。

⑩ お別れ・出棺

喪主　葬儀社　お寺

儀式が終わると葬儀社が出棺の準備をします。そして棺をあけてお顔の見納め、出棺します。火葬場までの移動手段については、基本的に自家用車をおすすめしています。自家用車が用意できなかったり、人数がとても多い場合は葬儀社にタクシーやマイクロバスを手配します。

ポイント

火葬場への移動手段

出棺直前になって火葬場へ行く人数が増えることがあります。３人までであれば恩楽寺の車に乗って頂けますが、それ以上になると当日にマイクロバスは手配できませんので、タクシーを手配する必要があります。またタクシーもすぐには来ないので、葬儀式が始まる前に火葬場まで行く人数を確認して予約しておく必要があります。

⑪ 火葬式執行

喪主　葬儀社　お寺

火葬場にて最後のお別れをして、火葬いたします。

⑫ お斎

喪主

火葬が終わるまで約二時間あるので、お食事をされる方が多いのです。

ポイント

待ち時間をどう過ごすか

一同が会している貴重な機会なので、これまでお寺葬では自分でお食事を手配されている方が多いです。必ずお店で食事をしないといけないわけではないので、自宅やお寺に戻って会食したり、中には火葬場の待合室で待機されたり、一時解散したりする方もありました。前日までに火葬場の近くのお店などを予約しておくと効率が良いでしょう。

⑬ 還骨・初七日

喪主　お寺

所定の時刻に火葬場に集合し、お骨上げをします。その後本堂あるいは自宅にもどり、還骨・初七日法要を執行します。

⑭ お骨と中陰法要

喪主　お寺

満中陰までの間、ご自宅の仏間にお骨と白木位牌を飾り置きするための中陰壇を設置し、中陰法要を勤めます。葬儀社に中陰壇一式を手配するか、またはお家にあるもので祭壇を用意することになります。その場合はお骨と白木位牌をちゃんと飾り置きできるようお手伝いいたします。

またご自宅にご本尊やお内仏がなかったり、中陰壇が設置できない場合は、満中陰まで恩楽寺の本堂にてお骨と白木位牌をお預かりすることもできます。

⑮ 満中陰・年忌

喪主　お寺

満中陰法要や百ヶ日法要、年忌法要を勤めましょう。場所は自宅、本堂、納骨堂、どちらでも承ります。

番外編１　自宅でお葬式

そもそも昔は自宅でお葬式をする方が一般的でありました。よって恩楽寺の「お寺葬」形式で、自宅でお葬式をしたいという場合も全力でサポートさせていただきます。お寺側の自宅葬儀の経験が少ないので、どのような形になるか未知数でありますが執行は可能です。また節約できる項目は増えると予想できますので、お寺葬よりもさらに負担を少なくできる可能性があります。

番外編２　お布施について

布施（ふせ）とは、古代インド語でダーナといい、見返りを求めずに慈悲（じひ）の心をもって施（ほど）す「喜捨（きしゃ）」を意味した修行のことをいいます。そして布施は次の３種に分かれます。

①法施（ほうせ）……儀式法要の執行、法話（ほうわ）など教化（きょうか）伝道（でんどう）を通じて仏の教えを施すこと

②財施（ざいせ）……お寺や仏法の護持（ごじ）相続（そうぞく）のために金品衣食などを施すこと

③無畏施（むいせ）……ただ寄り添い、対象の畏（おそ）れに安心（あんじん）を施すこと

お葬式や法事、法話などは①法施。お寺に寄進するお金などは②財施。そして僧侶が普段から心掛けているのが③無畏施です。

これらは喜捨といい、見返りを求めず喜んで捨てるという慈悲の行い（修行）です。ですから法施や無畏施への対価として財施するのではありません。よって請われれば無報酬で儀式法要を執行いたしますし、財施の多い少ないで法要の内容は変わりません。

私たち現代人は、「品物やサービスを等価で交換したい」という経済感覚があり、物事を自分の価値観で計っています。お布施に関して、「いくらお包みしたらよいのですか」という質問も、この感覚と同じです。

そして「その価値観と感覚を疑え、それが大問題なんだ」と仏教は説いてきました。

その正体は、もの、いのち、現象、あらゆる事を「どれくらい」かはかり、自分勝手な値打ちを決めつけて、より優れた方を欲する人間の煩悩（ぼんのう）であります。仏さまは「その煩悩に従い続けるのは、本当にかしこい生き方か？」とはるか昔から問うておいでなのです。半世紀以上も前のイギリスの社会学者マイケル・ヤングという方は、そんな価値観にとらわれた優性主義を批判し、それを促進する社会構造と国家体制に「それでは本当の幸せになれない」と警鐘を鳴らしました。より価値のあるものが欲しい、より優秀でいたいという煩悩にとらわれたままでは、やがてやってくるのは絶望と挫折しかないからです。

わが身が老いて、病気になって、生きていくのに支援がいる、自分ひとりでは何もできないと嘆いたり、あるいは大きな失敗などで色々失って絶望し、「私は価値を失った」と苦悩することになります。

苦悩の根源である煩悩にどうアプローチするか、それが仏教の基本的姿勢です。わが身照らすみ仏の教えに遇（あ）い、苦難の人生をどう生き抜いていくか、その尊い教えに遇い得た感動の結晶がお寺やお内仏です。「本当の幸せへ導くこの教えが大事だったんだ、どうか子孫代々伝わってくれ」というご先祖の思いが聞法道場のお寺を支えてきたのです。お寺は長い歴史の中そういう思いと願いで支えられてきた道場です。その護持相続を願うのが財施、つまり喜んで捨てるという皆さまから頂戴している尊いお布施であります。

ですから、お布施は、「教えが護られているお寺が存続し、仏法が子孫代々まで届きますように」という自覚した気持ちでしていただ

くものなのです。精一杯のお気持ちで何にも問題ありません。

「精一杯のお気持ちで結構」なのですが、それでも相場というものが知りたいという方には、前述のことをご理解いただいた上で「布施目安」をこっそりご案内しております。

知り得る方法がないため本当に困っているかたが多いので、見るに見かねてということです。

お知りになりたい方は私までお尋ねください。ご案内するのは「布施目安」でありますから、あくまで恩楽寺や近隣の真宗寺院を平均した目安ですので、それより多かろうが少なかろうが、儀式に差異はありません。

～ あ と が き ～

死の苦悩に直面して

釈尊が諸行無常を説かれた通り、私たち有情が全て生老病死であることは真理であります。しかし無明業障である私たち凡夫は、常日頃は煩悩のままに、その事実を意識せず遠ざけることに執着して思考・生活しています。そして自己の真実に現前と直面した時、煩悩に酔い遠ざけた分、苦悩します。

その苦悩を仏法では「機」といって大切に受け止めます。それは苦悩や都合の悪いことを遠ざけ、思いを思い通りにしていきたいという煩悩に執着していたために、さらに苦悩する自己の事実が照らし出された機会のことをいいます。

もう自分の力ではどうしようもない、だれか助けて下さい！　と自力がかなわないことを悟ったとき、阿弥陀如来の本願がはるか昔から私たちのいのちを支えていて、私たちの中にあったことに本当に気がつける、最大の機縁が苦悩なのであります。

自分あるいは大切な人がいよいよ死を迎える、宣告されることは本当に苦しいことです。

その悲嘆の中におられる方々へのケアの法務活動をしておりますが、煩悩若輩の私には、ただ寄り添って傾聴し、阿弥陀如来のおはたらきをお伝えすることしかできません。自身が本願を信じ念仏する身になって、死で終わらない物語を歩み始めるしかないのです。

如来の本願にすべておまかせしようと思い立つ時、苦悩が喜びに変わります。すなわち悪を転じて徳とする智慧を南無阿弥陀仏と申します。

死で終わらないいのちの物語

次に死で終わらないいのちの物語（南無阿弥陀仏）を生きた先達を紹介させていただきます。

親鸞聖人　『正信偈』より

往還回向由他力
正定之因唯信心

往・還の回向は他力に由る。
正定の因はただ信心なり。

阿弥陀如来のおはたらき（他力）によって、我ら凡夫は娑婆の縁尽きれば極楽浄土に往生する（往相回向）。

往生すればあらゆる執着、あらゆる煩悩から解脱して即時に成仏し、有縁（娑婆を生きる同朋）に本願の一道を知らせるのである（還相回向）。

浄土往生し成仏することが確定しているのは、ただ「信心」による。その「信心」は、自力の信心ではなく、如来より賜りたる他力の信心である。

越中塩村の幼女

『妙好人伝（大系真宗史料8）』より

越中国の塩村・大永寺に七歳になる幼女がいた。疱瘡にかかり、静養のために、三里ほど北にある富山の寺へ父母とともに移った。昼夜通して看病につくしたが、次第に病は重くなるばかりであった。（父母は）幼女の浄土往生への覚悟はどうなのだろうと思いながらも、なかなかそういう話をできずに日が経っていった。

しかし、もはや快復することはできない病状となり、母は機を見て幼女に「おまえはもう死ぬであろう、今死んだらどこへ行くのか」と尋ねた。

幼女は目を開いて、母の顔をながめながら、「私は死ねば極楽へまいります。阿弥陀さまが御馳走をされて待ちかねていらっしゃいます」と言って念仏を称えた。母はまた「その極楽へはどのようにしてゆくのか」と尋ねると、幼女は「阿弥陀さまに背負われてゆきます」と答えた。

母はたいそう喜び、これを寺の住職に語った。住職も喜んで幼女の枕もとにゆき、もう一度同じことを尋ねようとした。

母は「このように苦しがっておりますので、やめてください」と、やめさせようとした。しかし、住職は聞き入れず、母と同じ質問をした。すると答えはまた同じであった。

さて、さらに住職は「なぜ阿弥陀さまが背負ってゆくのか」と尋ねると、幼女は「私は、わけは存じませんが、阿弥陀さまは私が可愛くて可愛くてならないそうです」と答えたので、住職も涙を流して、「仏の不思議なご念力が幼女の心の中まで入りこんで、このように領解させてくださった」と言って喜んだ。この話は、そのころ世間に伝えられて、知らぬものはなかった。

「臨終やからと騒ぐことはない」高田俊彦

『完本　うらやましい死に方』
五木寛之編より

平成８年３月１６日、母やよがリウマチによる多臓器不全のため亡くなった。享年八十一。

数年前から、関節の変形で歩行ができなくなって入院していた。週の半ばと週末には、母を見に行くことが習慣になっていた。（中略）

「また来たか、もう来るなと言うて置いたがに。おらの年取った妹たちも来たし、お前ら子供も、また来てくれた。何度も危篤や、それ臨終やと、県境を越えて氷見の病院まで駆け付けてくれて、生きている者の方が、おらよりも大変やなあ」

「前から話して置いたとおり、臨終やからと騒ぐことはないぞ。平生業成やぞ。お文さまにあるやろ。おらは、もうお念仏のお蔭で正定聚や。だからして、臨終に良いも悪いもない。ひとの臨終をとやかく言うもんでないぞ。

おらの臨終は阿弥陀さまにまかせたがや。さあ早よう家へ帰って休んでくれ、運転には気をつけてな」

――「なむあみだ、なむあみだ……」母はこう言い終えると念仏を唱えながら、目を閉じた。（中略）

「俊、お前、またおったがか。あ、この前、会いたい者がおったら呼ぼうかと言うてくれたが、それはいらぬぞ。会う縁にある者にはもう会うた。俱会一処と言うぞ。会う縁にある者にはまた会える。ほんとうに誰も呼ばないでくれ。どうでもよいがやが葬式の事や。葬式は供養ではないぞ。それは娑婆の習いやから、見栄を

張らんでな、つつましいがにな」
「これは大事なことやが、お念仏や。お念仏は人それぞれが戴くもの、無理せんでいい。お前もご縁はいただいているのやからな。お念仏がひとりでに湧いてきて、それに押されて親さまの懐にとぼしこむ（注：金沢弁でつきすすむの意）、そんな心になるものや。おらは、そうして阿弥陀さまにすっかりまかせてしもうたがや」

母の言に従い十四日の深夜に病院を出た。十六日の朝、病院にいた妹から、六時三十九分に往ったとの電話があった。

母の念仏を耳にしながら、所用で妹が枕辺を離れた間のことであったと。

母の臨終には誰も立会っていない。

死んだら終いではない

私たちは等しくみな阿弥陀さまに願われた尊いいのちであります。必ず浄土に往生させていただき仏とならせていただくのです。そのはたらきを南無阿弥陀仏と申します。

南無阿弥陀仏という言葉は、阿弥陀仏に帰依をするという意味です。帰依をするとは、全てを投げ出して信じる、任せる。いのちを預けるという事です。それに対して阿弥陀仏は「ひとりも漏らさず救う」と誓っておられます。

信は願より生ずれば
念仏成仏自然なり
自然はすなわち報土なり
証大涅槃うたがわず

信心は阿弥陀如来の本願によって生ずるもので、念仏成仏することは自然他力のはたらきである。自然に他力によって往生した世界は如来の建立した浄土である。往生すれば、大涅槃の証を得ることを疑わない。　『高僧和讃』親鸞聖人

阿弥陀如来より願われているこの身は、特になんの修行も努力も必要なく、自然に生きてお念仏一つで往生させていただけるのであります。阿弥陀如来にこの身をお任せして、大慈悲に報謝して、念仏と共に誠心誠意、世の生業につくして参りましょう。

よって私たちは死んだらお終いではありません。親鸞聖人が、他力によって浄土に往生すれば即座に成仏し、仏として有縁にはたらくと教えられるように、私もまた、そういういのちを生きているといただいております。

だからお葬式は終わりの儀式ではありません。亡き人そして私たちが新たな出遇いと出発を確認する大切な儀式です。よってお葬式や満中陰が終わったから、仏事が終わったということはありません。継続して仏事を営み、私たちが仏法に遇い、仏さまの尊い導きを、人生を歩んでいく基礎としなければ、本当の意味で亡き人の供養になりません。

間に合わない自己に出遇ったら

私たちは生老病死などの苦悩・困難に直面したとき、自分の力や知識でなんとかしようと思って努力します。しかし人間の力（自力）では限界があり、険しい道であります。

対して、自力ではどんなにがんばっても苦悩や困難を克服できないので、阿弥陀如来に救ってもらおう（他力）、という易しい道があります。それを南無阿弥陀仏と申します。

何の努力もせずに、対価も払わずに他力にすがることはあつかましいことでしょうか。もっとあつかましいのは自力に溺れた私たちなのかもしれません。

そもそも私たちに本当にいのちを助けきる

力と知恵は備わっているのでしょうか。どれほど医療や科学が発達し、病気が治り長生きできるようになったとしても、それは本当にいのちが救われたことになるのでしょうか。

「あの治療法もダメ、この薬も効かない、手術してもダメ、あれも間に合わない、これも間に合わない。自力ではもうどうしようもない！」と、自力が完全に破れて、精根尽き果てた極限状態になった私たちは、一体どうするのでしょうか。「助けてください！」という純粋で深い願いが身を貫くのであります。その願いの声を「南無阿弥陀仏」と申します。

すべては南無阿弥陀仏に成就する

私はお坊さんのお役をいただいている身でありますので、沢山の往生を目の前にしてきました。小さい子どもが亡くなったり、事故などで若く突然亡くなったりというような、胸をえぐり取られるような苦悩、悲しみにも遇いました。生にしがみついてもがき苦しんで納得せぬまま逝った方、また見守られて年相応に緩やかに死んでいく方、先に紹介したように念仏を唱えながら往生された方、日ごろから「阿弥陀さんにお任せや」と言いながらいつのまにか臨終されていた方、いろいろです。

いずれのいのちも、どれだけ手を尽くしても、どれだけ祈っても、人間の力では死という問題をどうすることもできません。どれだけ思っても、私たちの思いや行いでは不十分でありました。だから、念仏だけが徹底した大慈悲心なんだと親鸞聖人が示してくださっています。

時代を超えてたくさんの方がその導きに遇って、「人生の中でこの教えが一番大事だったんだ、どうか子孫代々伝わってくれ」と仏教を支えてきたのです。せっかく尊いバトンが渡されてきたのに、本当の意味で私はそのために尽くすことができません。そうあるべきだと思うのに、全うできません。すぐに色や形にとらわれ効率や合理性を意識して、優劣にこだわり苦悩します。

何一つ完璧に徹底できない私であります。そのようなどうしようのない者こそ阿弥陀様のお目当てで、必ず救うと誓っておられます。

苦しさも悲しみも全て阿弥陀如来にお任せして称えましょう。すべては南無阿弥陀仏に成就します。

恩楽寺には春秋の彼岸、お盆、報恩講、永代経など各種法要が毎年必ず勤修されています。参詣される方々のほとんどが大切な人を亡くし、成仏された亡き人に導かれて、仏さまの教えに遇うために参られています。

お寺の法要や法事で仏法に遇い、無明業障のわが身を照らされて、生きる智慧としてゆきましょう。

毎朝お内仏の前に座って、正信偈を読んで、生活全体が如来の智慧と慈悲の中にあることをよろこびましょう。

毎月のご命日には、聖人のみ教えを確認するために、あるいは苦悩を打ち明けるためにお坊さんを呼んで、月忌を勤めましょう。

仏縁をくださる亡き人に感謝し、有縁に呼びかけ年忌法要を勤めて、念仏の輪をひろげましょう。

このこと一つとお念仏をいただいて、お念仏をとなえつつ、精神誠意世の生業に勤しんで生きて参りましょう。

平成29年1月　釋大信（乙部大信）

我がはらからに伝えつつ
浄土(みくに)の旅をともにせん

真宗大谷派
紫雲山 恩楽寺

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-14-18
TEL/FAX 06-6621-2856
メールアドレス onrakuji7676@gmail.com